

11 障害児教育

鈴尾修司・関 和典・藤村佳令・松本典子

1 研究テーマのとらえ方

(1) 養護学級の教育目標と「自立に向かう子どもたち」像

本学級では、「生活力のある児童」をめざしている。「生活力のある児童」の姿として次の3つの力を描いている。

- ・ことばや行動で自己を十分に表現し、主体的に行動する力
- ・さまざまな集団やいろいろな人とのかかわり合いの中で、生活や学習をする力
- ・いろいろな場面で判断したり、工夫したり継続したりして生活や学習をする力

この3つの力を総合すると、「児童がその子なりの考えをもち、よりよい方向をめざして進んで考え、判断し、表現していく（行動していく）力」であり、この力をもつ児童が「自立に向かう子ども」と考える。

(2) 人やものとのかかわり

児童が学校生活においてかかわる人は、友だちや教職員であり、かかわるものは、校内や教室に環境として設置されている物品や教材・教具である。児童の1日の学校生活を細かに見ていくと、多くの人やものとかかわっていることがわかる。その中で最も多くかかわっている対象、またはかかわってほしいと指導者が願っている対象は、友だちである。友だちとのかかわり方は、児童の実態によりさまざまである。直接的なかかわりもあれば、ものを介してのかかわりもある。いずれにせよ友だちとかかわることにより、ふれあいが生まれ、会話が生まれ、心の葛藤が生まれる。小さなかかわりの積み重ねが、児童の心を刺激し、鍛え、豊かにしていく。それが、自立に向かうための要因になっていくと考える。かかわる活動を通して、児童一人一人がかかわる楽しさを感じたり、かかわることに自信をもったりしながら、社会や多様な集団の中で自分らしさを発揮し、表現していくことができるようになることを願っている。

2 研究推進について

(1) 個々の実態とかかわりの場

児童がどのように人やものとかかわっていくか、一人一人の実態は異なっている。したがって、かかわりの場は、個々の実態によって設定される必要がある。そこで、単元全体の中のどこでかかわっていくか、1単位時間の中のどこでかかわっていくか、どのようなかかわりをするのかを明らかにしていく。そして、個々の目標行動の中に、かかわりに関する内容を設定していくようにした。

(2) かかわりを視点においた支援の捉え方

本学級では、めざす子ども像の具現化に向けて、次の点を大切にしながら実践を積み上げてきている。

- ①自己決定する場や活動の設定
- ②社会や多様な集団でのかかわりの場の設定
- ③学習の汎化を図る場や活動の設定

①については、昨年度までの研究テーマとかかわって実践、検証を行ってきた。本年度は、研究テーマ「人やものとかかわることを大切に」とかかわって、②についての研究を深めていく。研究推進の方法については、昨年度と同様に児童の「選択についての実態」と「集団へのかかわり」から「支援」のあり方について探っていく。その方策として、本学級が作成した独自の表（下）を

もとに研究を進めていくが、特に「集団へのかかわり」に重点をおく。まずは、表の「集団へのかかわり」の一部を児童の実態から見直し、「友だちとのかかわり方」の捉えについて検討してみた。児童の「友だちとのかかわり方」は、大きく「自己主張しながらかかわる」段階と「自分と友だちとの考えを比較し、調整を図りながらかかわる」段階があるのではないかと考えた。すなわち、「自己主張」することからかかわりが始まり、次第に「自他を比較したり、調整を図ったりする」姿へと変化していくのではないかと捉えた。本年度はこのように分割した表をもとに、児童の実態をより細かに捉え直し、個々の支援についてのあり方を探りながら研究を推進していく。

〈選択についての実態〉

〈 支 援 〉

〈集団へのかかわり〉

偶然手にした方を選んで
いる。

・児童が好んでいるものを
選択肢にする。

指導者といっしょに活動
をする。

友だちや指導者の模倣に
よって選んでいる。

・選択肢のイメージをもつ
ことができる具体的な手
かかりを示す。

指導者のことばかけで活
動をする。

好き、嫌いの好みの視点
が明らかになって選んで
いる。

・模倣できる場を多く設定
する。

友だちの動きを手がかり
に活動する。

友だちや指導者の活動へ
の関心から選んでいる。

・児童が特に好んでいる活
動の中での選択場面を設
定する。

友だちや指導者の活動を
見て見通しをもった方を
選んでいる。

・過去の類似の体験をイ
メージすることができる
具体的な手がかりを提示
する。

集団での活動の仕方がわ
かり自己主張しながら友
だちとかかわって活動す
る。

過去の経験から見通しの
もちやすい方を選んでい
る。

・児童が課題と捉えている
ことについて課題達成ま
での見通しをもつことが
できるような具体的な手
かかりを提示する。

集団での活動の仕方がわ
かり自分と友だちの考え
を比較し調整を図りなが
らかかわって活動する。

自分にとって乗り越えな
ければならない課題の有
無で選んでいる。

3 研究の成果

(1) 表をもとにした支援の妥当性について

本年度は、児童の実態から集団へのかかわりの部分を二分割していった。このことについては、本年度の実践の中から、「集団での活動の仕方が分かり、自己主張しながら友だちとかかわって活動する。」という実態から「集団での活動の仕方が分かり、自分と友だちの考えを比較し調整を図りながらかかわって活動する。」という実態に変容していった児童があることから、分けて表現したことは児童のより細かい支援を行うという点を考えると妥当であったといえるのではないかと考える。また、集団の中で「比較し調整を図りながら」活動を行うことについては、児童が全体場で決定をしていく段階で、実際に具体的な手がかりを提示することによって、他の児童とかかわりながら活動することができたと考える。このことは、たとえば「クリスマス会をしよう。」という総合学習の単元の中で実際に表の最下部の支援を行った児童が、全体場で他の児童とかかわりながら歌や踊りを決定していったということからもいえることである。

このように、表に基づいた支援をしていくことで、児童が他者やものとかかわりながら自分の考えを表現していくことにつながっていくと考える。

(2) 社会や多様な集団でのかかわりの場の設定について

本年度は、「多様な集団」をある程度本学級に限定した形で実践を行ってきた。その中でも友だちとのかかわりに主眼を置き、友だち同士のかかわりについての支援を研究の中心的な課題とした。そのことにより、児童が個々の思いを表現したり、自己主張したりするだけでなく、他の友だちのことを意識したり、友だちが行っていることについて関心を寄せたり、友だちと話し合いをしながら自分の意志を決定するという姿が見られるようになってきた。このことは、今後「多様な集団」を拡大してさらに大きな集団や、非日常的な集団にも広がっていくことができるきっかけになるのではないかと考える。そして、前述した「学習の汎化を図る」ことが児童にとってより身近なものになってくるのではなかろうか。

4 今後に向けての課題

(1) 表の細分化について

本年度は、昨年度から比較すると集団へのかかわりについて一カ所の検討を加え、実践・検証を行ってきたにすぎないが、他の部分についても、さらに細分化する必要があると考える。たとえば、〈集団へのかかわり〉の中で、友だちの動きを手がかりに活動する児童は、友だちとのかかわりの中でどの部分を手がかりにして活動をしているのかということや、本年度検討を加えた「比較し」「調整を図りながら」という箇所が、実際に一つの枠で支援を的確に表すことができるかということについても、今後も検討の必要があるのではないかと考える。本表を活用していきながらも、児童のより細かな〈集団へのかかわり〉における実態把握とそれに対応した的確な支援が求められるであろう。

(2) 本学級における「総合学習」の捉え方について

平成14年度より、新指導要領が完全実施になることを踏まえ、本学級でも「総合的な学習」についての研修を行ってきているところである。しかし、本学級での「総合学習」と「総合的な学習」との関連については、まだ明らかにしていない。児童が自立に向かうためには、この学習は大変重要な割合を占めることは言うまでもないが、本学級が長年行ってきた「総合学習」のねらいや学習内容と「総合的な学習」のねらいとを比較・検討し教育課程全体を見通していく作業をこれから行っていくことが必要になってくると考える。